

H-5 在宅で終末期医療を行った多発性骨髄腫の一症例

○佐藤菜穂美¹、山田実穂¹、小久保より子¹、渡部玲子²、得平道英²、木崎昌弘²

埼玉医科大学総合医療センター9階東病棟¹、同 血液内科²

【目的】様々な合併症を有する難治性多発性骨髄腫の終末期の最良の医療が求められている。今回我々は家族とともに、患者の意志を理解、支持しながら、在宅治療を行った一症例を経験したため報告する。【対象患者、結果】72歳女性。半年前に発症し、病勢の悪化による大量の胸水貯留により平成20年11月入院した。酸素カテーテル、ドレーンチューブによる動作の制限とともに全身の筋力低下が進行したが、食事、着替え、排泄はほぼ自力で行っていた。しかし車いすからトイレへの移動時に転倒し、移動時の看護師による見守りの必要性を説明したが、完全なADL自立への気持ちが強く、その後も転倒をくり返した。患者、家族（夫、娘、息子）ともに骨髄腫の厳しい病状、予後についての説明を発病当初から受け入れることができず、完全に治したいとの気持ちから、自立への希望が強かった。しかし時間経過とともに状態を理解した患者は在宅での終末期治療を希望されたが、家族は在宅治療の自信がなく、入院治療の継続により延命をはかることを願っていた。医療サイドから説明を続けたところ、徐々に家族は患者の希望を受け入れ、在宅治療の準備を整えた。2009年4月在宅酸素治療を導入し退院された。その後患者は永眠されるまでの一ヶ月あまりを自宅でご家族とともに過ごされた。【結論】骨痛、胸水貯留による呼吸障害など様々な苦痛を持った難しい病態の終末期患者の希望を看護サイドから支持し、家族の理解を得ることで、在宅終末期医療を行うことができた一症例であった。